

科学技術と日本の将来

「研究者のキャリアとライフイベントの両立可能への道」

名古屋大学
理学部 物理学科 4年
金岡 優依

1. はじめに

筆者はアメリカの大学での研究インターンシップへ参加したことがある。そこで目にしたのは、女性研究者の割合がはるかに大きく、研究と結婚や出産、育児などのライフイベントを両立させていたことである。日本とは違い博士課程中に結婚する人も多く見られた。それまで女性としてまたは研究者として生きるという2択が当たり前だと考えていた筆者にとってある意味衝撃的であった。さらには海外では男性が育児に参加することが当然のように考えられており、出産や子育てに対する考えの違いを知ることができた。

これらの経験や事実をもとに日本の出産や育児に対する社会的風潮の見直しを前提として、出産を控えたまたは育児を行う研究者へ学生ベビーシッターと研究補佐を用いた支援制度を提言したい。

2. ライフイベントと日本の女性研究者の現状

我が国における日本の女性研究者の割合は15.7%である^[1]。これはアメリカの34.3%^[1]と比較するとかなり低いことが明瞭である。年々女性研究者の割合は日本国内で増加しているが、諸外国と比較すると低いことは明らかである。

産休や育休の観点から日本では産休や育休中の給与は全額ではないが保証されており給付金も申請すれば受け取ることができる。^[2]しかし、現行の制度では非常勤研究員や任期付ポストは、社会保険未加入のため出産・育児休業制度が適用されず給付金が支払われない場合がある。しかし、アメリカでは研究者だけでなく公的に産休・育休中の賃金は払われず無給となる。^[3]そのためアメリカの働く女性は出産直前まで働き、出産後すぐに職場復帰する。競争が激しい研究分野であれば早期に復帰することは尚更であろう。一見すると日本の産休育休制度は恵まれているように思える。

ではなぜ女性研究者の割合が日本を大きく上回るのか。一つは日本では出産や育児に対して仕事の生産性が低下することから悲観的に捉えがちである。しかしアメリカでは出産や育児に対して消極的ではなく社会的に寛容であると考えられる。日本の社会的風潮として結婚や出産をするのならば仕事を続けることが困難であると考えられがちであるが、海外ではライフイベントもキャリアの一部と考えられているように思う。次にアメリカでは、女性も男性も協力して家事や育児を分担するのが当然と考えられていた。また、女性のキャリア

を軽んじるべきではなく、夫婦ともにキャリアアップするべきであるという考えが根本に根付いているように思う。この夫婦で家事育児を協力して行い女性のキャリアステップへの理解があるため、女性も仕事を続けやすいのであろう。日本の出産子育ては女の仕事という文化背景や社会風潮による圧力が出産適齢期である博士課程やポストドクターとして働く間に妊娠出産するのをためらってしまう大きな要因だと考える。

以上から女性研究者が安心して働く環境を作るための提言を述べたいと思う。

3. 提言

(1) 社会的風潮の意識改革

日本の男性育児休暇取得率において制度自体は世界一と言われるものの^[4]、諸外国と比較して 6.16%とかなり低い。^[5]この数字は家事育児は女性がするものという古典的な日本の考え方と異常な長時間労働の風習が大いに関係していると考ええる。日本人には性別で役割が分担されており、男性は働き、女性は家事育児をするという意識が深く根付いている。また、近年の共働き家庭の増加により多くは母親が子供の世話や家事を働きながらこなしている。これでは女性の負担は増えるばかりである。

さらに、日本の労働時間の長さも男性の育児休暇取得を妨げる要因と考える。企業だけでなく研究室でも職場に長く滞在するのが美德とされているところがあるように感じる。しかし、海外の研究室では皆 9 時ごろに来て 5 時ごろに帰りプライベートの時間や家事育児の時間を持つといった印象であった。まさしくライフワークバランスが確立されている。

最近では男性の「とるだけ育休」も問題となっている。^[6]男性が育児休暇を義務的に取るだけに終わり家事や育児に非協力的であるというものだ。

よって育児休暇の制度を確立するだけでなく、日本人の一人一人の意識そのものが性別によって家庭の役割を分けずに男女ともに仕事と家庭の両立をするのが当たり前という考えへ早急に変化していく必要があると考える。

(2) ベビーシッターの活用

では一人一人の意識が変化した上で大学はどのような支援ができるのだろうか。筆者は学生ベビーシッターの活用を推奨する。海外において学生が子供のお世話から家事までをアルバイトとして行うのは一般的である。日本ではあまりベビーシッターは普及してないが、専用の資格は必要ではなく学生でも行うことができる。ベビーシッターは不定期で子供の預かりを依頼することができるため研究が忙しい時期や論文の執筆に集中したい時のみなど自分の研究スケジュールに合わせて利用することが可能である。

さらにこのベビーシッターと研究者とのマッチングを所属する大学が行うことを提言する。所属大学が自身の大学内または近郊の大学の教育学部の保育学科や児童学科と連携し、そこに所属する学生と研究者をマッチングし学生を派遣する。連携大学からの学生の事前

研修と指導によって安全性を保障し、高額とされるベビーシッターの料金も利用料金の補助があれば低価格で利用することが可能だろうと考える。

日本では他人に子供を預けるということに抵抗が多く、ベビーシッターを利用する人は少ない。しかし、子供の教育や発達に関して学ぶ学生であれば比較的安心して子供を預けることができるだろう。さらに学生にとってもベビーシッターの経験は自身が学んだことを活かせるアウトプットの場となり、将来保育士や教育関連の仕事に就く際に大いに役に立つだろう。

(3) 学生による研究補佐

次に提言したいのが学生による研究補佐の制度である。これは妊娠中や育児中の研究者の研究を効率よく行い更なる研究時間確保のための支援である。例えば実験データの打ち込みや実験生物の飼育や世話などある程度ルーティン化している研究に必要な作業は学生が補佐することができるだろう。これによって作業に使用していた時間を論文執筆や高度な実験など研究者にしかできないことに充てることができると思う。研究者自身が実験補佐員を指揮できるようにし、自身が本当に行いたい実験や研究に集中することができ、効率よく研究を進めることができるだろう。とりわけ博士課程やポストドクターの研究者にとって継続して結果を出さねばいけない場合、この研究の時間の使い方と効率は重視されるだろう。さらに大学が研究補佐の学生に対して賃金を払うことで学生が補佐員としての責務を全うすることを保障する。

また、学生にとっても学部生のうちから研究のやり方や研究者としてのロールモデルを直に学べることができる。実際、海外の大学の研究室では学部1年生から研究室で補佐やプロジェクトに関与している生徒も多い。研究補佐という形ではあるものの、研究者が身近に存在することは学生にとっても今後のキャリアを考えるにあたり参考になるだろう。

4. おわりに

以上が筆者の提言である。前提として男性の育児参画と働き方の見直しが根底として挙げられる。実際、筆者が述べた社会的風潮の変化には長い時間を要し、提言が実用に至るのは大学との連携や予算が必要となり困難かもしれない。しかし、女性研究者の支援を考えた時に現行の支援制度にあるような研究者への補助金の付与でなく満足し安心して働ける環境を考えた時に上記の支援へ思い至った。筆者は結婚も出産もまだ経験していない学生であるが、子供は女性が面倒を見なければならないという社会の偏見が少しでもなくなり、将来女性研究者として安心して働き日本の科学技術がさらに発展することを願っている。

5. 参考文献

[1] 野田女性活躍担当大臣 説明資料

<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/jinsei100nen/dai5/siryou10.pdf>

(閲覧日 2020年1月13日)

[2] 厚生労働省 産休育休制度資料

<https://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/pamphlet/dl/31.pdf>

(閲覧日 2020年1月15日)

[3] プレジデントウーマン 日本の育休制度が恵まれてないが大嘘なワケ

<https://president.jp/articles/-/29670?page=3>

(閲覧日 2020年1月17日)

[4] unicef Are the world's richest countries family friendly?

https://www.unicef-irc.org/publications/pdf/Family-Friendly-Policies-Research_UNICEF_%202019.pdf

(閲覧日 2020年1月31日)

[5] 厚生労働省 平成30年度雇用均等基本調査(速報版)の結果

https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_05049.html

(閲覧日 2020年1月31日)

[6] FNN PRIME 「とるだけ育休」男性の3人に1人は家事育児時間が2時間以下…では、父親は何したらいいの？

https://www.fnn.jp/posts/00049897HDK/202001271830_FNNjpeditorsroom_HDK

(閲覧日 2020年1月31日)